

安心感に包まれた空気

副校長 井田 善之

「図画工作科の活動の中で、その子の感じ方が大切にされる。それは、その子を大切にすること。自分が大切にされている空間は心地よいもの。自分が大切にされているんだったら友達も大切にしたいと思う。」

これは、以前、私がある講演会に出かけた時、当時文部科学省に勤めていらっしやった岡田京子さん（現東京家政大学教授）が語った言葉です。

図画工作科の活動に限らず、子どもの活動には、その子の感じ方が生きています。その感じ方を尊いものとして大切に受け止めること、それは、その子の「自分は価値ある存在だ」という認識につながり、ひいてはその子の周囲への見方の変容につながっていく。そのことを岡田さんは優しくわかりやすい言葉で語ってくださいました。

先日、ある教室で、子どもたちが何やら楽しそうに活動をしていました。生活科の「おもちゃづくり」の授業でした。子どもたちは、紙コップや空き箱などでつくった手作りのおもちゃで遊んでいました。ふと、4人の男の子がにこにこ楽しげに遊んでいる様子が目に止まりました。見ていると、それぞれの子が自然なかたちで役割分担し、一つのおもちゃを動かして遊んでいました。「これは誰がつくったの。」と私が質問をすると「みんなだよ。」という答えが返ってきました。そこには、互いの思いを大切にできる安心した空気が流れていました。



横浜市の進める人権教育の理念の一つに「人とつながりから学び、自分も他の人も大切にできる子どもの育成」があります。社会の著しい変化の中、人間関係の希薄化や子どもの育ちの複雑化、多様化、SNSの普及に伴い、それまで見えていなかった人権課題の顕在化などが指摘されています。人と人とのつながり、ともに生きることを意味が改めて問われています。自分も他の人も大切に、尊重する心を育てること、様々な課題を自分の課題として捉え、共に解決に向かう子どもを育てることが、今とても大切に思います。

生活科の授業で、一人ひとりが知恵を出し合いできたおもちゃ。その制作の過程には、自分も他の人も大切にできる心があったのでしょうか。一人ひとりが互いの感じ方を大切に、安心感に包まれた空気をつくる、子どものその豊かな心のありようにこちらが学ばされる思いでした。

子どもは大人をよく見ています。私たちがよく見ている子どもたちに負けないくらい、私たちが子どもの感じ方、心の声に耳を傾け、子どもたちの心をよく見ていくということ、私たち自身が人と人とのつながりを大切に、互いの感じ方を尊重しながら、共に課題を解決していく姿勢を見せていくこと、その必要性を教職員一同改めて確認いたしました。

国の人権週間（12月4日～12月10日）を受け、本校では、11月14日（月）～12月21日（水）を人権月間と位置付けています。日常が重要であることはもとより、ことさらこの期間を私たち教職員の人権意識を振り返る機会とし、日々の教育活動において子どもの尊厳を傷つけることなく、「だれもが」「安心して」「豊かに」生活できる学校づくりに向かっているか、人権尊重の精神が基盤に据えられているかを再確認してまいります。

保護者や地域の皆様におかれましては、日頃より本校の教育活動にご支援いただくとともに、温かく見守り、ご声援いただいておりますことに心より感謝申し上げます。職員一同、教育活動の一層の充実に励んでまいります。今後とも何卒よろしく願いいたします。